

I 研究・調査活動 —研究推進センター—

[概要]

共同研究に関しては、「人間文化研究機構基幹研究プロジェクト」（5課題）、「基幹研究」（2課題3ブランチ）及び「基盤研究」9課題（新規4課題，継続5課題），開発型共同研究1課題を推進した。

人間文化研究機構基幹研究プロジェクトは，人間文化の新たな価値体系の創出に向けて，国内外の研究機関や地域社会等と組織的に連携して現代的諸課題の解明を目指す6年間のプロジェクトであり，その研究のスタイルにより「機関拠点型」，「広領域連携型」及び「ネットワーク型」の3つのタイプがある。歴博では「機関拠点型」として「総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築」，「広領域連携型」として「地域における歴史文化研究拠点の構築」，「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」，「ネットワーク型」として「ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用—日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築—」，「北米における日本関連在外資料調査研究・活用—言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築—」を推進している。

基幹研究は，「近代日本社会の形成・展開についての学際的・国際的研究」（平成30年度～）に加え，「水と人間の日本列島史」（平成31年度～）が設定され，研究が開始された。

基盤研究（館蔵資料型）では，「『聆涛閣集古帖』の総合資料学的研究」（東京大学史料編纂所・准教授・藤原重雄），「直良コレクションを構成する更新統産動物化石の分類学的再検討と現代的評価」（国立科学博物館地学研究部・グループ長・甲能直樹），「奈良暦師吉川家文書を中心とする暦・陰陽道研究の史料基盤形成」（京都女子大学・教授・梅田千尋），「番方旗本家に関する総合的研究—大番士・儒者杉原家文書を中心に—」（国文学研究資料館・プロジェクト研究員・三野行徳）の4課題を実施した。

「機関拠点型」の人間文化研究機構基幹研究プロジェクトでは，メタ資料学研究センターを中心に，全国の大学・研究機関等と連携しつつ共同研究を推進している。今年度も，奨励研究の外部公募（7件）を行うとともに，長崎大学他との学術交流協定のもと，9月に本館で集中講義「総合資料学」を行うなど教育活用への取り組みも継続している。また総合資料学の関連で，産学連携の共同研究として花王株式会社と「清潔と洗浄をめぐる総合的歴史文化研究」を推進している。

また，若手研究者育成への新たな取り組みとして，単年度で行う共同利用型共同研究（館蔵資料型，分析機器・設備利用型）の公募を行い，7件採択した。この成果の一部が学位論文や学会発表に活かされているケースが確認されるとともに，本館の館蔵資料情報の充実にも成果の反映が期待されている。

さらに，大学共同利用機関法人4機構合同で異分野融合・新分野創出を支援するための機構間連携・異分野連携研究プロジェクトとして，高エネルギー加速器研究機構とともに行う「負ミューオンによる歴史資料の非破壊内部元素組成分析」（研究代表：齋藤努）を継続し，7月と12月にシンポジウムを開催して成果の公開を行った。

各共同研究の成果は，『国立歴史民俗博物館研究報告（特集号）』として継続的に刊行されてきているが，本年度は，『古墳時代・三国時代における日朝関係史の再構築—倭と栄山江流域の関係を中心に—』（217号），『古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究 中間報告書』（218号），『歴史資料デジタルアーカイブデータを用いた知的構造の創生に関する研究—小袖屏風を対象として』（220号）の3冊を刊行した。また個別の研究成果を中心とした『国立歴史民俗博物館研究報告（通常号）』（219号）を刊行した。そして，共同研究の成果公開と社会還元を目的に，上野祥史編『東アジアと倭の眼で見た古墳時代』（国立歴史民俗博物館研究叢書7，朝倉書店），小島道裕他編『古文書の様式と国際比較』（勉誠出版），松木武彦他編『日本の古墳はなぜ巨大なのか—古代モニュメントの比較考古学—』（吉川弘文館）を刊行した。このほか『わくわくする研究を歴博で！—国立歴史民俗博物館の共同研究紹介—』vol.3を作成し，共同研究の研究過程の可視化と情報発信を行った。

一方で，研究・調査活動の原資である運営費交付金が削減されていく状況において，外部資金を導入しつつ研究の活性化を進めることは本館が取り組むべき課題であるが，科研費申請にあたっての勉強会や支援経費の助成等の取り組みを継続した。

海外の大学等研究機関との国際交流事業は，国際企画室のもと，第3期中期目標・中期計画期間においてその強化を図ることが課題となっているが，本年度は，学術交流協定に基づき，9件の国際交流事業を実施した。カナダ歴史博物館（カナダ）との国際シンポジウム「博物館と多文化社会—いかに博物館は多文化社会における対話の場となりうるか—」（2019年10月26日～27日，歴博）等を開催した。また，日本関連在外資料調査研究では，ウィーン世界博物館にて「明治の日本—ハイブリッド・フォン・シーボルトの収藏品から」展を開催（2020年3月，オー

ストリア)した。

このほか、外国人研究員1名(韓国)及び外国人招へい研究者3名(韓国1名、英国1名、ニュージーランド1名)を受け入れ、共同研究や総合展示等の調査・研究活動を推進するとともに、協定機関との人的ネットワーク構築や共同研究のシーズ発掘を継続した。

研究推進センター長 関沢まゆみ